Contact Zone 2017 特集論文②

女性のファッション
――バカ・ピグミーの刺青実践を事例に[1]

彭 宇潔

＜要旨＞
バカはアフリカのコンゴ盆地熱帯雨林に住むピグミー系狩猟採集集団の一つであり、非階層的な社会としてよく知られている。彼らの皮膚には数多くの傷跡が見られる。それらは伝統的な治療や日常的な怪我によって残された傷跡のほか、装飾のために残した刺青もあり、バカ語で「*tele*」と呼ばれる。刺青は、バカのあいだで昔から伝承されてきた身体装飾の一つである。本稿では、バカたちに見られる刺青実践に関する民族誌的な記述を提供し、バカの人々における社会文化的意味を明らかにする。聞き取り調査やバカの人々との日常会話によると、彼らは常に、刺青はファッション（*nyanga*）のためのものだと主張し、さらにそれは「女性のファッション」だと説明する。しかし、長期のフィールドワークにおける参与観察を通して、バカの人々は類似したスタイルを共有し、刺青を彫る過程に高い関心を持つ一方で、施術された結果をしばしば無視することがわかった。彼らが語る施術の動機と、施術（後）実践に見られる不一致は、刺青の象徴的な意味がバカの施術時の言動と必ずしも連関していないことを示している。したがって、バカ社会における刺青の施術は、結果としての刺青の模様の統一よりも、個々人の施術への参加が重要だと考えられる。そうした刺青の施術過程によって、身体に刻み込まれた刺青は、バカ社会における個人間の親密性を反映する証拠となる。

キーワード：刺青，身体装飾，バカ・ピグミー，アフリカ，ファッション
PENG Yujie　国立民族学博物館プロジェクト研究員／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員

1 本研究における現地調査は科学研究費補助金新学術領域「ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相――学習能力の進化に基づく実証的研究」（2010-2014）を用いておこなった。また、本稿は科学研究費補助金基盤研究 (A)「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクト・ゾーンにおける景観形成の自然誌」を用いて文献調査及び執筆をおこなった。

1　はじめに

本論文の研究対象は、アフリカのコンゴ盆地熱帯雨林地域に暮らすピグミー系狩猟採集民バカである。彼らは主にカメルーン、ガボン、コンゴ共和国、中央アフリカ共和国にまたがる熱帯雨林地域に居住している。本研究の目的は、バカの身体装飾、とりわけ彼（女）らが施す刺青の社会的意味を明らかにすることである。筆者は 2010 年の夏に初めてカメルーンに渡航し、バカたちに会った。バカの女性たちは最初少し照れていたが、明るい人たちであった。その時に気づいたのが、彼女たちの顔にある薄い青色の瘢痕であった。筆者のような外部社会の者にとって、そうした瘢痕は「雑でよくわからない瘢痕」に過ぎなかったのだが、彼女たちに聞くと、それはおしゃれ（*nyanga*）のために彫った刺青（*tele*）であるという（図 1）。

図 1　バカ女性の顔に見られる「*tele*」（2010 年 10 月筆者撮影）

その後、筆者はカメルーン東部州ブンバ - ベック国立公園近くのバカ集落（図 2）で長期的な現地調査をおこない、刺青について観察した。彼女らとの関係が深くなればなるほど、刺青に関する面白い現象が見られるようになった。たとえば、刺青の施術はほとんど予告も準備もなく突然始まること、下書きどおりにパターンを完成させなくても大丈夫だということ、そして施術がなされている途中にデザインを変えていっても何の問題もなく、さらに古い刺青の上にまったく異なるデザインの刺青を彫っても大丈夫だ、といったことであった。また、バカたちはいつも「刺青は女性のファッションだ（*tele yienge*

nyanga na wose）」と主張するが、刺青を入れる男性も少なくなく、刺青を入れていない女性がおしゃれでないというわけでもなかった。このような観察から、筆者はバカたちの刺青実践に関する研究を始めたのである。

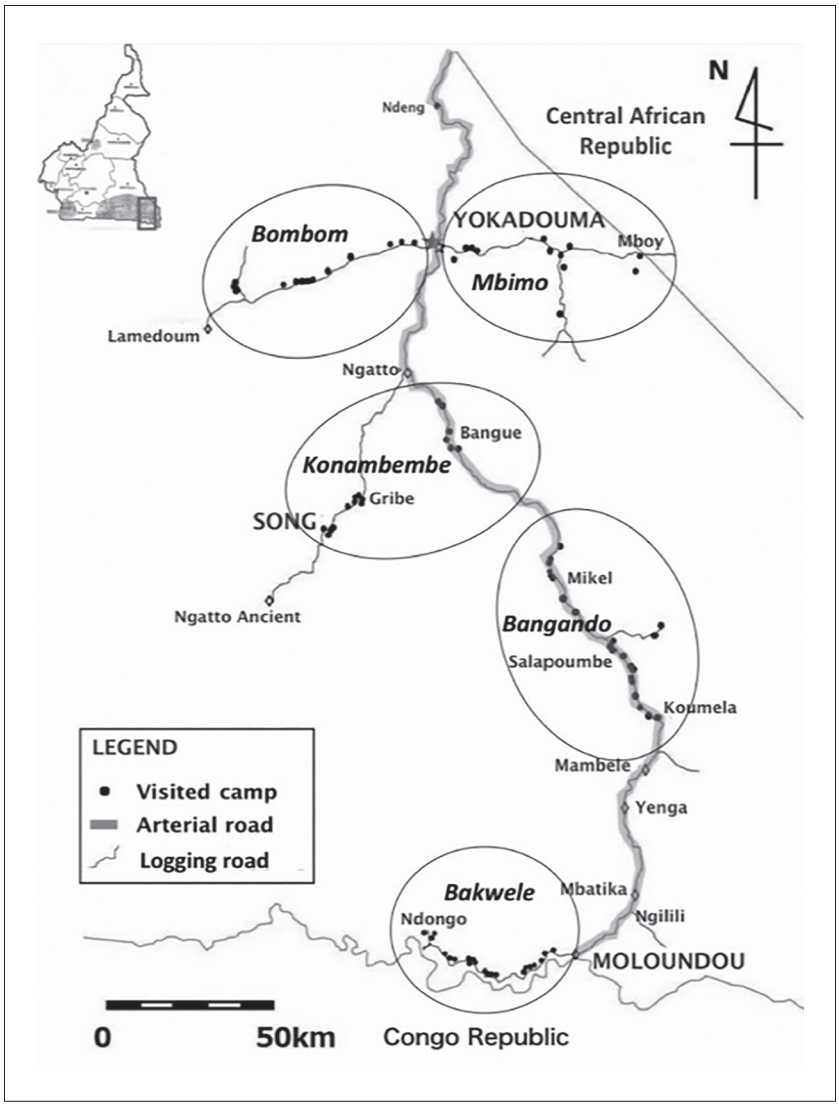

図 2　調査地域（現地調査に基づいて筆者作成）

2　これまでの刺青研究

これまでの刺青研究は概ね、1）社会的な地位や階層などといった社会的アイデンティティあるいは社会制度、2）宗教や宇宙論などといった文化表象、そして 3）美学・芸術、という三つの側面からアプローチされてきた。こうした議論の中では、装飾に多様

な動機があるという民族誌的な分析［Kroeber 1901］や、装飾の表象的な意味に関するFranz Boas［2010］の考察がよく知られている。また、80年代にMarilyn Strathern［Strathern & Strathern 1971; Strathern 1979］やTerence Turner［2012］の研究により、身体装飾文化と社会的地位、個人の社会化との関係が注目された。その後90年代に、Alfred Gell［1993］はポリネシア諸島の刺青文化における施術のプロセスを、社会制度と関連して分析した。これらの先行研究は、刺青文化に関する人類学的、民族誌的考察に大きな影響を与えた。

これまでの民族誌的研究では、アフリカ人の身体装飾文化はしばしばその劣等性やプリミティブさを示すものだとされてきた。奴隷貿易時期には、北米へ輸出されるアフリカ人の体にオーナーシップを表す瘢痕が作られることが一般的に見られた［Windley 1983］。一方、伝統的な刺青文化は、サハラ以南のアフリカの諸民族に多数見られる。コンゴ盆地に暮らす民族ティブにおいては、女性の腹部を中心に対称的な瘢痕が大量に施されるが、それは成年女性の性的魅力を表すものとされる［Lincoln 1975］。そして、ティブ男性における特定の社会的組織のメンバーシップを示すための瘢痕である［Bohannan 1956］。ナイジェリアのガアンダ人においては、人は身体に瘢痕を入れる儀礼を受けて初めてそのジェンダーが表象されるようになる［Berns 1988］。東ナイジェリアのイボ人の瘢痕は、個人の年齢や性、政治的な権力を示すものであった。永久的に残る瘢痕の施術が廃止されて以来、女性たちの成年儀礼でボディ・ペインティングが施されるようになったが［Cole & Aniokor 1984］、身体装飾で社会的な地位を示すという慣習は依然として維持されている。

Mark Auslander［1993］とHeidi Gengenbach［2003］はアフリカの刺青文化について、従来の刺青の模様や施術プロセスなどといった「かたち」にとどまらず、それにかかわる人々の社会関係に焦点を当てて議論を深めた。Enid Schildkrout［2004: 332］が指摘したように、アフリカの諸社会において刺青は「かつて彼らのアイデンティティ及びエリートの社会地位、秘密結社のメンバーシップと関連していた」。しかし、GengenbachとAuslanderの研究も含め、これまでのアフリカ刺青文化に関する研究は聞き取り調査に基づいた記述と解釈が主要な方法論となっており、実際の施術の場で人々はどのように行為しているかという意味でのリアリティは見えなかった。それはJohannes Fabian［2001］が批判していた従来の人類学、とくに象徴主義的な分析に多く見られる「同時代性の欠如」だと言える。

一方、本研究の研究対象であるバカの身体特徴を体系的に記載したのはHenri Victor VallouisとPoulette Marquer［1976: 23-60］である。彼らはバカの身長、手足の形、歯の形、刺青の模様などといった身体的特徴を、聞き取り調査を通してまとめた。しかしその調査対象はほとんど男性で、しかも調査された人数は数十人であった。こうしたデータは、バカの身体的な特徴についてある程度のイメージを与えることができるが、統計的な分析にかけられるまでには至ってないと言える。近年のピグミー研究においては、刺青などの身体加工に触れた研究がいくつかある。たとえば、アカ・ピグミーにおいては、特殊な刺青または瘢痕を施されることによって精霊ダンスなどの秘密結社のメンバーになるという儀

礼的な意味が生じる［Lewis 2002: 64-68］。またバカ・ピグミーにおいては、瘢痕をつけることは伝統的な治療法の一環として利用されている［佐藤 2005: 10-11］。しかしこのような記述は、刺青そのものではなく、儀礼のプロセスの一環、あるいは民俗医学の手段の一つとしての刺青の研究だと言える。ピグミー系狩猟採集民たちが刺青を施術するきっかけとは何なのか、彼ら自身は刺青についてどのように語っているのかといった点は、上述の先行研究ではまだ十分に議論されていない。そこで本論文では、バカの刺青の施術がおこなわれる場面や、彼らの刺青に関する語りを事例として提示し、詳細に分析する。そして、バカ社会における刺青を施すことの意味、さらに女性たちが語る「ファッション（*nyanga*）」とは何かを明らかにすることをめざす。

3　森の狩猟採集民バカ

バカの人口は、およそ 3 万〜 4 万人と推定されている［Hewlett 1996］。彼らは他のピグミー系集団と同様に、これまで森を移動しながら狩猟と採集を主な生業活動として生活してきた。国家による 1960 年代の定住政策の以前から、彼らは農耕民と相互依存関係を保ってきた。住み込み調査をおこなったカメルーン東部州ソン村（図 2 を参考）には、約 100 人のバントゥー系農耕民コナンベンベと、300 〜 400 人のバカが定住している。バカの定住集落は農耕民の定住村の南側と北側に二つ作られている。両集落は血縁関係と通婚関係でつながっており、人々は互いにしばしば訪問しあっている。筆者は南側のバカの定住集落でフィールドワークをおこなってきた。この集落はさらに 3 〜 4 つの小さい血縁集団に分かれている。血縁集団の長老（*kukuma*）たちは互いに血縁関係か姻戚関係を持っている。しかし、このような長老たちは集落を作った人として認識されているものの、その集落に対して絶対的な権威や権力を持っているわけではない。集落のメンバーたちは自分の意志によって行動できるのである。先行研究ではこうした権威の不在や高度な自律性は「平等社会」として語られている［Woodburn 1982a］。

バカたちは小乾季（7 月〜 8 月）と大乾季（12 月〜 3 月）には森に入り、長期にわたって移動しながら狩猟と採集活動をおこなうが、小雨季（4 月〜 6 月）と大雨季（9 月〜 11 月）には道路沿いの定住集落に留まり、日帰りの罠猟と採集活動をしながら、近くの農耕民の畑仕事を手伝うことで現金と生活必需品を入手する。彼らの狩猟採集活動は自家消費のためだけではなく、農耕民の依頼を受けての狩猟や、果実の採集といったものもある。農耕民はその報酬として現金や自家製の蒸留酒をバカたちに手渡すが、とくに家事を手伝ってくれたバカの女性には主食のプランテンバナナや塩、石鹸などの生活用品、布や服、アクセサリーなどを渡す。

ピグミー系狩猟採集民の身体装飾は、刺青、前歯加工、ピアシング、火傷瘢痕という 4 つの身体加工に加え、ボディ・ペインティング、樹皮で作られた腰巻きが知られている［Thompson & Bahuchet 1991; Hewlett & Cavalli-Sforza 1991］。しかし筆者の調査地では、現在、4 つの身体加工しか見られなくなっている。カメルーン東部州で広域的な聞き取り調査をおこなった結果、現在のバカの若者たちは男性における髪染め、女性におけるネイ

リング、化粧などが流行りはじめていることが明らかになった。前述したように、バカたちにとって、服やアクセサリーなどは近隣の農耕民との相互依存関係を通して獲得するものである。バカたちは近隣の農耕民たちとほとんど変わらない服を着ている。男性はズボンとTシャツ、ジャケット、女性はTシャツに布で巻いたスカートという格好をしている。しかし、彼らは農耕民ほど大量な服を持っているわけではなく、いつも破れかかっている服を着ている。森のキャンプに住んでいる場合、バカの女性はほとんど布一枚を体に巻いているだけであり、男性は穴だらけのTシャツとズボンを身に着けている。しかし定住集落に戻るとより清潔な格好をする。とくに、遠くの親戚を訪ねて行く時は、自分が持つ最もいい服に着替える。

4　バカの刺青

筆者は2010年から2014年にかけてカメルーン南東部のバカたちを訪問し、約1200人に対して聞き取り調査をおこない、バカの身体装飾について定量的に分析した。その結果として、バカの基本的な身体加工（歯の加工、ピアス、刺青、火傷瘢痕）は主に女性に施されていることが明らかになった。バカの刺青は、顔面に施されるものが最も多い。女性では、腹部と腰部に施されるものも少なくない。そのほか、上腕や胸部、ふくらはぎにも時々見られる。男性で刺青を持っている人は少なく、持っていたとしても顔面にしか見られなかった。刺青の施術者は女性で、刺青を施す道具と材料はカミソリ、スス、水という極めてシンプルなものである。カミソリは一つの世帯にほぼ一つしかなく、髪の毛を剃ったりして、日常的におこなわれる瀉血治療によく利用される。ススは傷口に色を付けるために使われ、バカたちはよく石油ランプから掻き出して大量に集める。刺青を彫る方法は簡単で、瀉血治療とほとんど変わらない。彼女らはまず彫りたい身体の部位にススで黒い線をひいて下書きをする。そしてカミソリでその線に沿って短い傷口を沢山作り、そこにススをすり込む。その後水で傷口を一回洗い、傷口をていねいにチェックする。もし血が出ていない傷口があったら、そこを血が出るようにもう一度切って水で洗う。すべての傷口が切れたら、最後にススをもう一回力を入れてすり込む。傷口にかさぶたができるまで約2日間かかり、その後傷口のかさぶたをていねいに剥がす。傷口がまだ治っていない段階で唐辛子やトマトの葉を潰したペーストを傷口にすり込む人もいるが、それは「黒をきれいに残すためにやっている」と説明された。

このように、バカの刺青施術は血まみれで痛い施術だということがわかるだろう。聞き取り調査によると、痛みが怖くて刺青の施術を受けなかったバカも少なくなかった。しかしそれでもバカにおいては、約80%以上の女性と30%以上の男性は刺青の施術を受けており、そのほとんどは自分が小さい頃に受けたのだと主張している。施術をおこなった人は約30%が自分の母親で、20%は自分の姉妹だということが明らかになった［Peng 2016a: 74］。施術を受ける頻度は高い一方で、刺青を彫る技能を持つバカは少なかった。これまで調査した85集落において、約80人のみが自分で彫る技術を持っていると主張していた。しかし雑談や直接の観察からは、「昔は彫ってみたが失敗したからやめた」とい

う言明も多く得られた。彼女らによると、刺青を彫る技能は誰か特定の人が積極的に教えてくれたわけではなくて、彼女ら自身が積極的に施術を実践し、試行錯誤の中で徐々にその技能を身に付けたそうである［Peng 2016b］。筆者は長い付き合いを通して、彼女らが実践したり語ったりする刺青の持つ、社会的な意味を考察することができるようになった。それは本論の冒頭にも述べたように、実際の施術の場面を検討して初めてわかってきたのである。

5　施術の場面

5-1　突然の始まり

フィールドではしばしばバカたちの突然の行動に驚かされる。長期的な調査をおこなったソン村には合計 10 ヶ月滞在したが、刺青施術はわずか 10 回だけであった。決まった時期または年齢に、決まった人に頼んで刺青を施すことはなく［Peng 2016a: 75-81］、予告もなく施術が始まるのである。筆者は何回か刺青の施術を見逃してしまったため、その後女性 SY を注意深く観察した。SY は 30 代後半から 40 代の既婚女性で、新生児から 10 代後半の子どもが 6 人いる。SY に対する観察を通して、バカたちの刺青施術は突然始まるものだということが明らかになった。

【事例 1】雑談の中で始まる刺青の施術

ある日の朝、あるバカの男性が私にナイフを借りにきた。子どもたちの歯を削るために、よく切れるナイフが欲しかったと説明してくれた。私は自分のナイフを貸して、彼らの歯の加工を観察していた。8 人の子どもが歯の加工を受けた後、それを見るために集まってきた人々は施術の場を去ったが、二人の 20 代の女性 LB と DD だけはそのまま残り、雑談を続けていた。それを見た私は彼女たちの雑談に参加することにした。ちょうどその時、DD は LB の家に行った。「何をするの？」と私は LB に聞いた。LB は「私たちは刺青を彫るよ」と答えた。しばらくして、DD は石油ランプとカミソリ、バケツ半分の水を持って戻ってきた。LB は周りにある草の茎を拾って、それを約 5 センチに折って、石油ランプから掻き出されたススを付けて DD の顔に下書きを始めた。DD は自分のあごを指差して、彫る場所を LB に示した。彼女たちが下書きをしている時、SY がたまたまそこを通りかかった。SY は彼女らの施術を見かけ、立ち止まった。SY は LB と DD とおしゃべりしながら、自分の娘たちを呼んできた。「あなたたちに刺青を彫ってあげようか？」。SY は娘たちの意見を聞いた。年上の子はそれをことわって逃げたが、下の子はその提案に同意した。そして、SY も自分の娘への施術を始めた。（フィールドノート（以下 FN と略す）、2010 年 11 月 10 日から抜粋）

この事例では、LB と DD の施術がいつから計画されていたかはわからなかったが、SY とその娘の施術は LB と DD の施術を見たことがきっかけとなって始まったことは明らかである。つまり、すでに進行している施術を見ることによって、新たな施術が誘発される

ことがあるわけである。同じように、彫られる人も他の施術を見て、彫ってもらおうとする事例もあった。

【事例 2】被施術者の増加

ある日、私は SY と一緒に散歩していた。彼女が隣のキャンプの友人に会いに行きたいと言ったので、私もついて行ったのである。隣のキャンプに着いて、人々と挨拶を交わした。そこで、人々に「最近パン（筆者）の仕事はうまく進んでいるの？」と聞かれたが、私は「いや、あなたたちが最近新たな刺青をしないから私はただのんびりしているだけだよ」と答えた。それを聞いた人々は笑いながら「じゃわれわれは新しい刺青を彫ろうか」と言った。そして SY は 20 代の女性 X に刺青の施術を求められた。また施術を見ていた 30 代の女性 Y は、「SY に私のひたいに刺青を彫ってもらおう」と突然言い出した。X の施術が終わった後、Y は SY に頼み、彼女が希望する刺青を彫ってもらった（図 3）。一方、施術が終わった X は集まりから離れて、赤ちゃんに乳をあげながらずっと黙ってすわっていた。（FN, 2011 年 10 月 12 日から抜粋）

図 3　刺青を彫る風景（事例 2）（2011 年 11 月筆者撮影）

事例 2 の女性 Y は、その前に施術を受けた女性 X と同じように、その日に刺青を彫ってもらう予定などはなかった。その日にいきなり始まった施術は、筆者を喜ばせることがその主なモチベーションだったことがわかる。Y は X の施術を見て、自分も施術してほしくなったのである。女性 Y は以前から刺青がほしかったのかもしれないが、この日にそれを実行するという計画があらかじめあったわけではない。つまり、バカにおける刺青の施術はある特定の時期にやらなければならないといった義務性や儀礼的な意味などはな

く、その場の雰囲気に影響されて施術を突然決めるといった即興性が高いのだということがわかる。また、X は自分の施術が終わったらすぐにその場を去り、集まりの注目は Y に移ってしまった。X は自分の施術の結果を見ようともしなかったのである。

5-2　デザインの非決定性と重なり

バカたちが刺青の施術を始めても、最初に決めたデザインが貫徹されるわけではない。事例 1 でも触れたように、LB と DD はたまたま施術の場を通った SY の意見を受けて、DD のあごだけに入れるデザインを、あごと頬と両方に入れるものに変えた。その後 SY は自分の娘の頬とひたいに刺青を彫りたがっていたが、子どもが途中泣き出したせいで、頬の分だけを彫り終わった。その後の施術にはさらなる変化が見られた。

【事例 3】施術の途中に変化するデザイン

［事例 1 の続き］LB が DD の刺青を完成させた後、DD はかごを背負って近くの森に行った。SY も娘に泣かれて、彼女への施術を中止した。そこに残った LB は SY の新たなターゲットになった。「あなたに彫ってあげようか？頬にね」と SY は LB を口説いた。LB は笑いながら施術を受けるかどうか迷っていたが、結局 SY のアドバイスを受けた。やがて SY は下書きを始めたが、実際に LB に描いたのは頬とひたいにだった。しかし、石油ランプのススを使い切ってしまったので、結局完成したのは LB のひたいの刺青だけだった。「え？終わったの？」と私は彼女たちに聞いた。「そうよ、終わった。おわり（*ambee*）」と彼女たちは笑って答えた。（FN, 2010 年 11 月 10 日から抜粋）

事例 3 では、SY が LB を口説く時に提案したのは頬の刺青であった、しかし彫ろうとするデザインはその後 2 回も変わり、結局 LB はひたいの刺青だけを施術してもらった。彼女らが欲しているのはある特定のデザインを完成することではなく、刺青を彫るという行為そのもののようであった。さらに、彫られる刺青は昔の刺青と重なっても問題ないということもしばしばあった。

【事例 4】古い刺青と新しい刺青の重なり

少女 Jjr（10 ～ 12 歳）は、いとこの JS（女子、12 ～ 14 歳）に 1 週間に 2 回も刺青をしてくれるように頼んでいた。1 回目、Jjr は JS に右の頬に 3 行のラインを入れてもらった。しかし色がきれいに残らず、薄い青色と瘢痕が混ざっていた。Jjr は 5 日後に JS に 2 回目の施術を頼んだ。Jjr は自分の頬の両側に 1 行ずつラインを入れるというデザインを頼んだ。1 回目とまったく異なるデザインであった。このデザインは 5 日前に彫ったばかりのデザインを覆って彫られた。結局、Jjr の頬の刺青はどういうデザインかよくわからないパターンになってしまった（図 4）。（2011 年 10 月 21 日から 10 月 28 日までの FN から抜粋）

図 4　2 回の施術を受けた少女 Jir の顔（2011 年 11 月筆者撮影）

Jjr のような事例は、バカ社会において決して珍しくはない。図 1 で示された女性たちの顔も何回もの施術を経て得た刺青が重なった結果である。バカたちの刺青の施術場面における、(1) 突然開始されること、(2) 最初の予定どおりにデザインを完成しなくてもよいこと、そして (3) 過去の施術で残された刺青（瘢痕）にそれほど配慮せずに新たなデザインを加えること、の 3 点は、彼女らの「現在への志向（present-oriented）」［Bloch 1977: 289］という特徴が反映されたものだと考えられる。とくに興味深かったのは事例 2 の後半である。人々の注目を浴びていた X は自分の施術が終わった後、自分の顔に新たに完成した刺青を見たり周りの人に見てもらってコメントを求めたりはしなかった。施術対象が Y に変わると、周りで見ていた人々の関心もすぐに X から Y に移った。つまり、完成したばかり刺青は「現在」という舞台から退出させられ、バカたちの関心は現在進行中の施術だけを優先して見ていたのである。

6　刺青をめぐる語り

施術の場だけではなく、バカたち自身が彫られた刺青についてどのように語っているのかを考察すべきである。筆者は 2011 年にカメルーン東部州で広域調査を実施し、千人以上のバカに対して聞き取り調査をおこなった。インタビュー時には質問に対する答えを求めることが主な目的であったが、彼らが自分の持っている刺青についてどのように語ってくれるかも調査の対象であった。バカの体には多数の瘢痕が見られる。それらには佐藤弘明［2005］や Jerom Lewis［2002］らが調査した、伝統的な治療の痕や秘密結社などのメンバーシップを象徴する瘢痕だけではなく、本論の研究対象の刺青も含まれている。しかし、バカたちは治療痕などの他の瘢痕よりも、とりわけ自分が持つ刺青に関して鮮明な記

憶を持っていることが明らかになった。

ここで興味深かったのが、バカたちに自らが持つ刺青に関する話を聞く時、彼女らが覚えている刺青の数が、目で見える刺青の数より多いことがよくあったという点である。女性たちは自分が受けてきた刺青の施術を話す時に、自分の体のどこに入れたかを示してくれることが多かった。しかし、彼女たちが指差してくれたところに刺青ないしそのような瘢痕さえ見られない事例がしばしばあった。刺青自体が消えていたとしても、バカたちは施術を受けた時点での施術者、場所、自分のおおまかな年齢そしてその時共に施術を受けた人々までも鮮明に覚えていることが多い。

【事例 5】消えた刺青と残る記憶

私が滞在していたキャンプの隣に住んでいる女性 MD（30 代）は、自分の刺青にまつわる経験を語ってくれた。彼女は顔に刺青を叔母や義理の母に入れてもらっていた。「顔以外の部位にまだ刺青があるの？」と私は続いて聞いた。「あるよ、お腹にあるよ」、MD は自分のお腹を手で軽く叩きながら答えた。私はそれを見たいと頼んだ。MD は T シャツを巻き上げて、へその周りをまた手で軽く叩きながら、「ここだよ」と教えてくれた。しかし私にはそれが見つけられなかった。「おばさん、見えないけど、どこなの？」と私はもう一回聞いた。「ほらここだよ」と彼女は自分のお腹を指したが、改めて見て、「あら、ないね。私のファッションは私の刺青と一緒になくなったわ（*nyanga-le a kpingi te tele a le*）」と言いながら笑った。（FN, 2011 年 10 月 7 日から抜粋）

これと似た事例は少なくなかった。記憶が鮮明なのに、刺青自体が消えたことに気づいていないことから、バカたちが刺青の施術を受けた後、あまり刺青そのものに関心を向けていないことがわかるだろう。

広域調査の雑談時に、バカたちの刺青に対する考えを聞いた。ほとんどのバカは「刺青は女性のファッションだ」と答えた。なかでもある老女のコメントが印象的であった。「男は刺青（を見るの）が好きだ。彼らは女の体にある刺青を見るのが好きだ。彼らは刺青を持っている女の子を好むのだ」と彼女は興奮して大きな声で主張した。周りの若い女の子たちは照れながら笑っていた。その 3 年後に私は同じ話を違う若い女性たちから聞いた。「男性たちは刺青を見るのよ！」と彼女らは一斉に迷いなく答えた。このように、少なくともバカの女性にとって刺青は男性に自分の性的魅力を示すものだと考えられていることがわかる。私はバカの男性にも意見を求めてみた。男性たちの答えは不明瞭で、結論としては、彼らにとって刺青があるか否かがその子が好きになる重要な基準ではないことが明らかになった。実際のところ、分藤大翼［2004］の記述のように、若いバカの男女の交際や性行為は、ダンスの途中あるいはその後に起こることが最も多いのである。一方、刺青が女性の性的魅力だという意見に反対する女性の声もあった。有名な彫り手 SY は、とくにそれに対して強く反対する。「刺青は男性が見るためのものではない！われわれ女性はおしゃれ（*nyanga*）のために刺青を彫ったのだ！」と。SY や事例 5 の MD が主張している「おしゃれ／ファッション（*nyanga*）」とはいったい何なの

か、彼女らが語る文脈からはなかなか理解しづらいものである。「おしゃれ／ファッション」を女性の性的魅力として読み取っているバカもいる一方で、それに反対するバカもいたのである。

7　考察

本論では、ピグミー系狩猟採集民バカの刺青実践について、施術場面の特徴とバカたちの語りに焦点を当てて記述をおこなってきた。施術の場面においては、バカたちは下書きのデザインや完成されたパターンより、進行中の施術そのものに関心を示していた。彼女らは古い刺青より今現在彫られている新しい刺青に関心を向けている。そして他人の施術を見ることによって自分も彫りたいという気持ちが誘発され、次々と新しい施術がおこなわれる。そこでは菅原和孝が描いたブッシュマンのグルーミングと類似して［Sugawara 1984］、身体を触れ合うことを通して個人間のコミュニケーションが成り立っているのだと考えられる。一方、刺青に対する解釈には多様性が見られる。そこで、「女性のファッション」としての刺青は、バカたちにとってどのような意味があるのか、施術中とそれ以外の場面という二つの文脈から考察したい。

施術場面においては、バカたちは互いの身体の接触を通して、施術の進行それ自体に高い関心を示す。その場にいる参与者たち、とくに彫る人と彫られる人の触れ合いによって、施術が継続されるのである。刺青を彫ることはグルーミングと同じで、二人一組の活動である。他の進行中のペアを見たら、自分もそうしたくなり、周りの誰かを誘って施術を始めるのだと考えられる。これは一種の行為的な同調だと考えてよい。こういった記述は他の研究者の報告にもある。木村大治はバカたちが何かあったらすぐにドドドとあちこちから集まってきて同じ行為を次々とやり始める現象を「ドドド現象」と呼んでいる［木村 2003: 155-159］。また、菅原はブッシュマンのグルーミングを考察する時、彼女らは本当にすべてノミを殺そうとしてグルーミングしているわけではなくて、その行為は彼女らの社会的行為であり、彼女らの社会関係と社会的役割に深くプログラミングされていると述べている［Sugawara 1984: 36-37］。バカの事例では、可視化されたデザインやパターン、自己像などへの関心は低く、刺青を施すことによる互いの身体の触り合いの経験が重要だと言える。Edward Hall［1969: 181-184］が指摘したように、異なる文化においては、たとえ同じ物理的状況でも、人々の身体的経験は異なるのである。バカたちにおいては、刺青を施すことを通してその場にいる人々と同じような行動をとることが満足を引き起こすのに対して、マオリ社会などでは華麗な刺青を他者に開示することこそが刺青を求める主な動機なのである［Gell 1993: 288-296］。

そうした同調行為の産物として、目に見える刺青の模様が施術を受けたバカの体に残される。バカたちはこのような「今しか見ない」という特徴を持つ刺青の施術に何を求めているのであろうか。なぜこの「永久に残るものに最小限に投資する」［Woodburn 1982b: 205］性格の産物として残された刺青が、女性のファッション（*nyanga na wose*）という集団的アイデンティティを生み出すのだろう。実際、事例にも見られたように、

生きている間、消えないかに思える刺青は、バカたちにとって必ずしも永久に残るものではない。彼らが「*tele*（刺青）」と呼んでいる身体加工は消える可能性があるもので、これまで長く研究されてきた永続性を持つ刺青とは異なる性格を持っていると考えられる。刺青の施術はバカたちの体に見えるパターンを刻み込むというより、個人個人の記憶に過去の一瞬一瞬を刻み込むという社会的な意味を持っていると言えるだろう。刺青は施術を受けたバカ女性にとって、施術の場に一緒にいた人々とつながった過去が可視化されたものなのであるが、より社会的な意味を持つのは、目に見える（または見えなくなった）刺青そのものではなく、施術に関わる行為とそれによって残された記憶であろう。また、それは Gengenbach が指摘した南モザンビークの女性たちに見られる「フェロー・ガールズ」［Gengenbach 2003: 534］に近いが、バカ社会では Gengenbach が記述した仲間や周りの視線から生じたプレッシャーがなく、バカの女性たちは積極的に施術にかかわっていた。つまり、バカたちにとって、目で見えるパターンの統一より、「一緒にやった」という行為の同調の方が、一種のフェローシップを感じさせるのであろう。彼女らのそうした「差を作らない」刺青からも、研究者たちが言う狩猟採集社会の「平等主義」が垣間見える。「性的魅力」であろうと「自分のおしゃれ」であろうと、周りの他人がやっていることを見て自分もしたくなるという欲求は、彼女らにとっては同一である。本論はバカの刺青実践の事例を取りあげることで、本特集「序」にも指摘された「装いにおける美しさへの希求や装うことそれ自体の快楽が見落とされている」部分を補充できたと考える。また、バカたちが語るファッション（*nyanga*）とは、風戸が指摘したように、「身体装飾の欲求は外的・内的な規範等により抑制され、自己表現としての身体装飾は環境とすり合わされていた」（本特集風戸論文に参照）ことと同様に、特にバカの女性たちにとって、その場の流行を敏感に察して他のメンバーと同調するという実践である。それはわれわれが言うファッションと似たものであるが、世界各地、各時代において流行りがさまざまなファッションの、さらに時間的空間的に圧縮したものだと言っていいであろう。

＜参照文献＞

分藤大翼　2004 「カメルーン南東部、バカ・ピグミーの精霊儀礼と音楽実践における社会的相互行為」博士学位申請論文、京都大学。

風戸真理　2017 「身体装飾をめぐる子ども・大人・社会の交渉」『コンタクト・ゾーン』9: 347-366。

木村大治　2003 『共在感覚――アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』 京都大学学術出版会。

佐藤弘明　2005 「病歴を物語る Baka ピグミーの治療痕」『浜松医科大学紀要　一般教育』19: 9-24。

Auslander, Mark 1993 “Open the Wombs!”: the Symbolic Politics of Modern Ngoni Witchfinding. In Jean Comaroff & John Comaroff eds., *Modernity and Its Malcontents: Ritual and Power in*

Postcolonial Africa. Chicago/London: The University of Chicago Press, pp. 167-192.

Berns, Marla 1988 Ga'anda Scarification: a Model for Art and Identity. In A. Rubin ed., *Marks of Civilization: Artistic Transformations of the Human Body*. California: University of California Press, pp. 57-76.

Boas, Franz 2010(1927) *Primitive Art*. New York: Dover Publications.

Bohannan, Paul 1956 Beauty and Scarification amongst the Tiv. *Man* 56(9): 116-121.

Bloch, Maurice 1977 The Past and the Present in the Present. *Man*, New Series, 12(2): 278-292.

Cole, Herbert & Chike Aniakor 1984 *Igbo Arts: Community and Cosmos*. LA: Los Angeles Museum of Natural History University of California.

Fabian, Johannes 2001(1983) *Time and the Other: How Anthropology Makes Its Object*. New York: Columbia University Press.

Gell, Alfred 1993 *Wrapping in Images: Tattooing in Polynesia*. New York: Oxford University Press.

Gengenbach, Heidi 2003 Boundaries of Beauty: Tattooed Secrets of Women's History in Magude District, Southern Mozambique. *Journal of Women's History* 14(4): 106-141.

Hall, Edward 1969 *The Hidden Dimension*. New York: Anchor Books.

Hewlett, Barry 1996 Cultural Diversity among African Pygmies. In K. Susan ed., *Cultural Diversity among Twentieth-Century Foragers: An African Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 215-244.

Hewlett, Barry & Luigi Luca Cavalli-Sforza 1991 Barkcloth of the Mbuti Women. *Human Mosaic* 25(1-2): 1-9.

Kroeber, Alfred 1901 Decorative Symbolism of the Arapaho. *American Anthropologist*, New Series, 3(2): 308-336.

Schildkrout, Enid 2004 Inscribing the Body. *Annual Review of Anthropology* 33: 319-344.

Strathern, Andrew & Marilyn Strathern 1971 *Self-Decoration in Mount Hagen*. London: Gerald Duckworth.

Strathern, Marilyn 1979 The Self in Self- Decoration. *Oceania* 49: 241-257.

Sugawara, Kazuyoshi 1984 Spatial Proximity and Bodily Contact among the Central Kalahari San. *African Study Monographs*, Supplementary issue 3: 1-43.

Thompson,Robert Farris et Serge Bahuchet 1991 *Pygmées? Peintures sur écorce battue des Mbuti*. Éditions Dapper, Haut-Zaïre.

Turner, Terence 2012(1980) The Social Skin. *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 2 (2): 486-504.

Lewis, Jerome 2002 Forest Hunter Gatherers and Their World: A Study of the Mbendjele Yaka Pygmies of Congo-Brazzaville and Their Secular and Religious Activities and Representations. London: London School of Economics and Political Science, University of London. The Thesis for the Degree of Doctor of Philosophy.

Lincoln, Bruce 1975 The Religious Significance of Women's Scarification among the Tiv. *Africa* 45(3): 316-326.

Peng, Yujie 2016a The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern

Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95.
――――2016b Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In Hideaki Terashima & Barry S. Hewlett eds., *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*. Tokyo: Springer, pp.83-93.
Vallois Henri Victor et Paulette Marquer 1976 *Les Pygmées Baka du Cameroun: anthropologie et ethnographie avec une annexe démographique*. Ed. du Muséum National d'Histoire Naturelle.
Woodburn, James 1982a Egalitarian Societies. *Man* 17(3): 431-451.
Woodburn, James 1982b Social Dimentions of Death in Four African Hunting and Gathering Societies. In M. Bloch & J. Parry eds., *Death & the regeneration of life*. NY, USA: Cambridge University Press, pp. 187-210.
Windley, Lathen 1983 *Runaway Slave Advertisements: A Documentary History from the 1730s to 1790*, Vol. 3. Westport, CT: Greenwood Publishing Group.

Women's Fashion:
The Case of Tattoo Practice among the Baka Pygmy

Yujie PENG

Keywords: Tattoo, body decoration, Baka Pygmy, Africa, fashion

The Baka is one of the Pygmy hunter-gatherer groups who live in the rainforest of central Africa and is known for its non-hierarchical society. They have numerous scars on their skin, such as tattoos that are only for decoration and scars caused by traditional medical treatments or accidental injuries. A popular traditional medical treatment of the Baka is bloodletting, which makes massive scars on their skin. On the other hand, tattoos, which are called '*tele*' in the Baka language, are a traditional way to decorate their bodies. This paper provides ethnographic description about the practice of tattooing among the Baka people and aims to figure out the socio-cultural meanings of tattoos for them. During interviews and daily chatting with the Baka, they always assert that tattoos are for achieving fashion (*nyanga*), and therefore they consider their tattoos to be "women's fashion." However, through ethnographic observation of the practices of tattooing, I found the Baka share a similar style at the present moment and have a high interest in the process of tattooing, but often ignore its result. Thus among the Baka, the performance of tattooing should be understood as a process of connecting individuals. The mismatch found between their interpretation and carving behavior implies that the symbolic

evaluation for scars might not be inevitably related to the scarifying behavior among the Baka people. It is suggested that, individuals are connected through performing scarification, but they might not be categorized into different groups only by the carved bodily symbols in Baka society.